

『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長

—その3『朝びらき丸 東の海へ』における正しき認識への旅—後篇 王者の自己認識

野呂有子

(□) ルースイーの自己認識

『ナルニア国年代記』において、アスランの意思を理解するルースイーの力は群を抜いている。これについては、だれしも異存のないところであろうから、ここで改めて詳しく論じるつもりはない。しかし、そのルースイーでさえも、ときには過ちを犯す。そして、ルースイーが自分でも気づかなかった自己の一面—自己の中の他者、といいかえてもよからう—と遭遇するのが、この船旅の道中であることは、きわめて意義深い。なぜなら、この船旅の終りに、ルースイーはエドモンドとともに再びナルニアに来ることはない、とアスランに宣告されるのである。¹

① 海蛇との遭遇

竜の島を出発して一週間ほどしたころ、ルースイーは船の後方に得体の知れないものを見つける。丸い岩のようなものが一列に並んで、それが船のあとを追ってくるのだった。とつぜん、頭をもたげて正体を現わしたのは巨大な海蛇だった。船をひと巻きしてこっぴみじんにしようとする海蛇を、乗組員全員が一丸となっておしかえす。

このとき、ユースタス、リーピーチーフ、カスピアン、そしてルースイーはおのおのにふさわしい役割を果たしている。弓矢もきかない固いうるこの海蛇に、一同がぼう然としているとき、あの臆病で卑怯だったユースタスが、まずひと太刀をあびせる。実質的なダメージを怪物にあたえることはほとんどなかったが、このユースタスのいさおしに一同は奮い立つ。つぎにリーピーチーフが「たたかうな！おすんだ」とさげんで、小さな身体を怪物の巨体におしつける。これが最良の戦法だと悟った一同は、連なって列をつくり怪物をおし返そうとする。司令官たるカスピアンの号令で、「どこになにかがあるかをきちんと知っている」²ルースイーはおのをとりに走る。こうして、カスピアンの指揮のもとに乗組員全員が力を合わせた結果、「朝びらき丸」は危機から脱出する。

ここで、ユースタスの日記に記述された嵐の場面を思い起こしてみよう。ユースタスは、船酔いを口実に協力を惜しみ、自室にこもっていた。船が沈めば自分の命も助からない、というときにである。ユースタスは事実を認識する力がまったくなかったわけである。その結果、マストは折れ、一人が波にさらわれ、水も食料も不足することになった。(ユースタスが竜になることによって、この損失を多少とも償うことができたのは、まったくアスランの配剤というよりほかはない。)すなわち、もし嵐のときに全員が(つまりユースタスが)協力していれば、嵐から無事に脱出することができたかもしれないのだ。

一方、海蛇との戦いにおいては、すでに指摘したように、乗組員がそれぞれ自分のもてる限りの力をふりしぼり、状況を正しく認識しようと努めている。しかも、おのおのの力が分散することなく、ひとつに結集されている。いわば乗組員たちの輪が海蛇の輪にたちまされたといえよう。そして、その口火を切ったのがユースタスのいさおしであった。

こうしてみると、嵐→竜の島→海蛇との遭遇、というストーリーの展開は恣意的なものではなく、内的必然性に支配されていることが明らかになるであろう。

ひとつことつけ加えておきたいことがある。それは、海蛇が巨大な身体と力をもつが、霊的には幼稚な存在として描かれている、ということだ。そして、作者 C.S.ルイスは、小さな存在にすぎぬものたちが、ひとりひとり英知の限りをつくし、力をあわせて事にあたれば、難問と見えたものも案外するりと、(この海蛇のように)解

¹ *The Voyage of the Dawn Treader*, (1952; rpt. London; William Collins Sons & Co. Ltd., 1981), p.188. 以下、*The Voyage*とする。

² *Ibid.*, p.93.

決するものだということを、この場面を通して読者に語りかけ、カづけているにちがいない。

② 触れるものすべてが黄金に変わる水の島

海蛇の輪から脱出して四、五日後、「朝びらき丸」はまた別の島に到着し、そこで水を補給しようとする。二つの川が流れているが、じつはそのうちのひとつは、ふれるものすべてを黄金に変えてしまう水の流れる川だった。情性で船をこいでいたドリニアンが、なんとなく、そうとは知らずに危険な川に行きそうになったとき、雨がふり出し、子どもたちの適確な判断が救いとなる。なに気ない手短な叙述であるが、専門家がときには判断を誤ること、しろうとの健全な判断が危険を避け得る場合もあることを、ルイスが指摘しているようで興味深い。

水をつみ終わった子どもたちは、二つ目の川のみなもととなる湖に行く。湖のふちには、さびたよろいがかいてあり、底には金の像が沈んでいる。思慮深いエドモンドの推理と行動によって、像は、行方不明の七人の領主の一人にちがいないことが明らかになる。湖の水が、あらゆるものを黄金に変えることがわかったとき、カスピアンは「顔をほてらせて」³このことを秘密にせよ、さもなくば死刑だ、と命令する。エドモンドは、命令されるすじあいはない、とつばね、あやうく刃傷沙汰になりかける。このとき、ルーシーが巨大なライオンの姿を認め、一同はわれに帰る。アスランの出現により最悪の事態が避けられたのだった。カスピアンは、この島を「死水島」と名づけ、だれも立ち寄りぬようと命じる。

この場面で初めて、読者はカスピアンの意外な側面を認識する。そして、完全に回心したと思われたエドモンドに、まだこのような側面があったということも。黄金水は人を狂わせ、貪欲や傲慢を呼び醒ますのだ。この場面でも、水(ただの水ではないが)は、子どもたちの自己認識——自分でも気づかなかった自己の否定的な側面の認識——を促すうえで、重要な役割を果たしている。

③ 声の島

北西からふいていた風が、ま西からふき始め、「朝びらき丸」は、いまや昇る朝日の中心におかっすすみ出す。いよいよ終りなき海に入ったか、船旅もこれまでか、と思われた日の「あかつき」⁴の中に、「朝びらき丸」と朝日のちょうどまん中にしまがあらわれる。

この島の奇異なところは、人がひとりも見えない、それにもかかわらず、芝生や並木などがよく整備されていて、人の手の入ったものであることがよく感じられる、という点である。

ルーシーがみなから遅れて、くつのなかの小石をとっていると、地ひびきが聞こえてくる。地ひびきははだいに大きくなり、ルーシーのそばでとまる。そして、話し声がきこえてくる。その内容は、浜辺でまちぶせして、「朝びらき丸」の乗員がもどってくる場所をつかまえよう、というものだった。「見えない敵」たちは、ルーシーに、魔法使いの部屋にある魔法の本のなかから呪文をさがして、自分たちにかけている魔法をどうように、と要求する。妹を案じるエドモンドにたいし、ルーシーは、「そうすれば、わたしの命もみんなの命も助かるのよ」⁵と引き受けることを承知する。リーピーチーフは「女王陛下の名誉をいやまず、気高き英雄的な行いでありませう」といって、ルーシーを励ます。

ルーシーがただひとりで廊下を歩いていくと、奇妙なひげづらが壁からとび出たように思われ、ぎょっとする。心を落ち着けてじっとみると、なんのことはない、髪の毛とひげがついた顔形の鏡に自分自身の顔がうつっているにすぎなかった。

いよいよ魔法使いの部屋に入り、呪文の本を開くと、中は手書きでさまざまな魔法の呪文が書きつらねてあった。目あての呪文を見つけ出す前に、ルーシーの心を引きつけた呪文が二つあった。ひとつは「あまたの人にたちまさせて美くなる呪文」⁶と「友人が自分をどう思っているかを知る呪文」だった。「美くなる

³ *Ibid.*, p.100. および、拙論「『ナルニア国年代記』における子供たちの成長——その1『ライオンと魔女』におけるエドモンドの成長——」『東京成徳短期大学紀要』第18号(昭和60年3月), p.69および注(15)を参照いただきたい。

⁴ *The Voyage*, p.101.

⁵ *Ibid.*, p.111.

⁶ *Ibid.*, p.118.

呪文」にそえられたさし絵には、ルーシーそっくりの人物が登場し、見ている本人がくらくらするほどの美しさを放っている。ナルニア近辺の国王たちがやってきて、美ぼうのルーシーを求めて闘うが、やがてそれは本ものの戦争に広がり、ナルニア世界は荒れすさんでいく。まるで『イリアッド』⁷の世界である。つぎにイギリスへ戻ったルーシーは、姉のスーザンに自分の美しさを誇示する、という醜い姿がさし絵の中に展開される。こうした結果が本のなかに示されているのに、それでもルーシーはあえて呪文をとなえようとする。そのとき、さし絵のなかに偉大なアスランの顔があらわれて、ルーシーをいましめる。あわててページをくると、つぎにひかえていたのが、友人の心を知る呪文であった。ルーシーはおろかにも、前の呪文をとなえられなかったうめ合わせをするように、呪文を唱えてしまう。そして、友人のこぼれに傷つき、くやし涙を流すのである。

「美しくなりたい」という願望と「自分がどう思われているかをしりたい」という願望をふたつながらに、われらがルーシーが持っていたということで、少なからず失望するルーシー・ファンもいるかもしれない。しかし、「女の子ならだれもがいちどは抱く願望」⁸をルーシーも持っていたということで、筆者は逆に安堵するものである。いつもあれほど勇気にあふれ、直感も鋭く、内的に澄んだ目をもつルーシーは、『ナルニア国年代記』中の理想的人物の一人であるが、この場面は、そんなルーシーを、欠点に悩む読者にとって急に身近な存在に感じさせ、親しみを感じさせてくれるであろう。そして、ルーシー自身はいままで自分でも気づかずにいた自己の否定的側面を認識した。それは、あの奇妙な鏡にうつったグロテスクな顔が自分の顔であることに気づいたときの心情に通ずるものである。

つぎのページには「心のいたでをやわらげる呪文」がもっており、それは三ページにわたっていた。呪文というよりもおはなしといったほうがよく、終りには、「これほど美しいおはなしはいままで読んだこともないわ」とルーシーは思う。もういちど読み直そうとすると、ページは先へは進めるが、もとへはもとどれないことに気づく。これがこの魔法の本の大きな特徴だった。そして、思い出そうとしても思い出せない。ただ、それがこの上なく美しい話だったという以外には、この点では、読者はルーシーよりもはるかに恵まれているといえよう。『ナルニア国年代記』をわれわれはなんどでも読み返すことができるのだから。

読み直しができないという点では、この魔法の本は人生に非常によく似ている。人間はいちど生きてしまった時を再び生き直すことはできないからだ。「かりに……だったとしたら」といってみてもしかたがないと、アスランがいくども警告しているではないか。⁹

ルーシーがページをめくると、さし絵がなく、「かくされたものを目に見えるようにする呪文」がどうとうあらわれる。呪文をとなえると、さし絵があぶり出しのように浮き出てくる。そして、背後にやわらかな重おもしろい足音がして、アスランそのひとが現れる。喜びに輝きつつルーシーがアスランを迎えると、「わたくはずっとここにいた。そなたがわたくしを見えるようにしたただけだ」とアスランは告げる。ここで重要なことが二つある。ひとつは、アスランの遍在ということ、もうひとつは、アスラン自身も自分の定めた法に従う、ということである。ここには、ルイスが絶対者をどのような存在として捉えているかが明示されている。

アスランは、この家の主人である魔法使いとルーシーをひき合わせる。主人とうちとけて話すうち、さまざまながら、「見えない敵」たちの言っていたこととは食い違っていることに気づく。主人はアスランの信任もあり、穏やかで判断力もすぐれているが、「ばかものたち」の統領は臆病ものでうぬぼれが強く、他のものたちは統領のいうことをうのみにしておうむ返しに付和雷同するのが常である。かれらは自分たちが魔法使いのために「醜くされた」と思いこみ、姿の見えなくなる呪文を自分たちにかけてしまった。しかし、じつは、姿を消す以前から自己の姿を正しく認識することのできない——自分のもとの姿を見ることのできない——存在だったわけである。

「ばかものたち」は、昼寝から眼覚めて見える姿にもどっているのに気づいた。かれらは巨大な一本足の小人で、バッタのように飛んで移動しているのだった。正体が不明だったときは不気味に思えた小人たちだが、いったん正体がわかってしまえば、むしろゆかいでひょうきんな存在であった。

ドリニアンがいままで航海の日どりを述べると、魔法使いの広げた羊皮紙の上に一同がこれまでに訪れた島があらわれ、完全な地図ができあがる。だが、これからさきのことについては魔法使いもなにも教えられなかった。

⁷ ホメロスの叙事詩

⁸ 授業で学生(全員女子)の大半がこのように反応した。

⁹ *The Voyage*, p.123.

④ くらやみの島

声の島をあとにして十三日目に、エドモンドが高い黒っぽい山のようなものが海から突き出しているのに気づく。近づくとそれはまったくくらやみそのものといったものであることがわかる。一同がためらいを見せるなかで、リーピーチーフだけが、くらやみのなかへつき進んでいくべきだと主張する。ルーサーも同意する。

一同はたいまつをかかげ、じゅうぶん武装してくらやみのなかに入っていく。なぎのなかで、船のたてるさざ波が、重く不気味である。光がまったくささず、こぎ手以外の乗員は寒さでふるえ出す。とつぜん、人間のものとは思われぬようなさびげ声がきこえる。カスピアの命令で助け上げられた男は髪は白くなり、ほおはげっそりと落ちこんで、恐怖のために目はかっと見開かれていた。男は、すぐ逃げ出すように、ここは悪夢が現実になる島だ、と告げる。おじ気づいた乗員たちは、どっと走り、かいをこぎ始める。ドリニアンさえもが、かいをぐるりとこぎまわし、水夫長も、いそいでこぎようと命じる。

おそれ知らないリーピーチーフだけが、カスピアの命令もまたずに乗組員が動きだしたことを、「反乱した、臆病ぶり」といってとどめようとするが、とうのカスピアが「かいをこげ」とわめくありさまである。カスピアのことばは、あるいは退却する勇気のあらわれか、とも思えるかもしれないが、それは違う。なぜなら、「朝びらき丸」の乗員たちは、カスピアの命令に従って行動したのではない。それぞれが、自分の心の内によびさまされた恐怖にかられて、衝動的に行動しているからだ。そして、カスピア自身も、冷静な判断を忘れ、臆病かぜにふかれて命令しているにすぎない。この時点でのカスピアは、まだ本当の意味での王者の域には到達していないといえよう。

臆病かぜにふかれたものが、事実を誤認し、判断をあやまることは『カスピアン王子のつのぶえ』におけるスーザン¹⁰の例ですで見たとおりである。じつ、このあと「朝びらき丸」は一層深みにはまっていく。ひとりひとりの耳にちがう音がきこえはじめ、確実に恐怖にとりつかれていく。来たときよりもずっと長い時間、みなで必死にこいでいるのに、くらやみからはまだ抜け出すことができない。もしやこのまま、くらやみからずっと抜け出せないのではないか、という疑念が一同の心にわきおこる。救出された男は絶望のためにヒステリックに笑いながら、「けっしてここからは抜け出せないんだ」とわめく。

ルーサーはこのとき見はり台〔= *fighting top* (イタリクスは筆者による)〕にいて、文字通り、先頭にたつてこの見えない敵である恐怖と必死に戦っている。ルーサーがアスランの名を口にして助けを求めると、不思議に心が落ちつきを取りもどす。

そのとき、くらやみのなかにひとすじの光がさしこみ、船全体をサーチライトのように照らす。乗員は全員、光をみつめ、そのうしろには暗い、長くどがった影がうつし出される。

ルーサーは、光のなかになにかがいるのに気づく。初め十字架のように見えたものは、あほうどり〔= *albatross*〕であった。あほうどりは船上を三度旋回すると、行手を導くようにゆっくりと飛ぶ。そして、ルーサーは「勇気をもて、いとしきものよ」というアスランの声をきき、あの芳しい息が顔にかかったのを感じる。まもなくやみは薄れ、一同は、けっさく恐れるようなことはなにもなかったことを認識するのである。

救出された男はルーブ卿であることがわかり、カスピアン王との感激の対面となった。くらやみ島は消え去り、ルーサーはそれがアスランの業であることを悟る。

光を奪われた、くらやみの世界で「朝びらき丸」の乗員が出会った怪異なるものの正体は、じつは乗員一人ひとりの心のなかに巣食う、いわれなき恐怖と、そして絶望であった、といってよかるう。いわれなき恐怖は、人の絆をたち切り、ひとりひとりを絶望におとし入れる。そして、絶望は、人をくらやみの世界に押しとどめ、そこからの脱出を不可能にするものであった。いわれなき恐怖と絶望は、自己の内にある、極めて暗く、どがった影としてここでは象徴されている。そして、アスランの光に照らされて、ルーサーをはじめとする乗員が、この最大の敵——自己の内なる最大の敵——の存在を確認したときに、すでに救いは始まっていたのである。

蛇足ながら、くらやみ島の場面には、S.T.コーリッジの『老水夫行』のイメージが濃厚である。『朝びらき丸

¹⁰ *Prince Caspian* (1951; rpt. London; William Collins Sons & Co. Ltd., 1980), p.133 のアスランのことば、および、拙論『『ナルニア国年代記』における子供たちの成長——その2『カスピアン王子のつのぶえ』における霊的相剋と肉の闘争——』pp. 51-54 を参照いただきたい。

東の海へ』の読者が、成長してこの詩に出会ったとき、すぐれた二つの文学作品の相乗効果により、さらに豊かなイメージが、読者の心に生成されることであろう。

⑤ 結び

前編ですでに述べたように、第二部のテーマは「ルーシーを中心とした、未知の世界の正しき認識」である。ルーシーたちの前にあらわれるものはみな、その実体は、初め見たときとは異なっていた。一列に並んで動く、岩のように見えたものは海蛇だったし、一見、ただの水に思われたものは人を黄金に像に変えてしまう死水だった。声だけで姿の見えぬ奇怪な生物は、少しのうたりんの愉快的な小人たちだったし、黒い高山のように見えたものは実体のないくらやみだった。そして、その実体を正しく認識したとき、恐怖は消え去っていくのだった。

第二部は、戦いの舞台が、船上→陸上→陸上→船上、というふうに移動している。そして、海上での海蛇との戦いでは、気絶したリーピチーブと、それを介抱するルーシー以外の全員が力を合わせ、カスピアの指揮のもとに人間の鎖をつかって、海蛇の輪を追いつめた。これにたいし、くらやみの島では恐怖のために、てんでばらばらに切り離されてしまった乗員たちが、見かけの上では力を合わせてこいでいても、力が拡散し、船がどうどう巡りをしてしまったなかで、リーピチーブとルーシーだけが勇敢に、見えない敵と戦ってゆくのである。肉弾戦では無気に近かったルーシーとリーピチーブは、霊的な戦いでは圧倒的な強さをみせる。また、陸地での戦いでは、死水をめぐって、カスピアとエドモンドが思いもかけぬ否定的な側面を露呈したが、声の島ではこんどはルーシーが、やはり思いもよらぬ否定的な側面を露呈する。これらのことをわかりやすくするために、簡単な表にしてみよう。なお、①海蛇 ②死水島 ③声の島 ④くらやみ島、とする。

	①	②	③	④
戦いの場	船上	陸上	陸上	船上
戦う人	ルーシーとリーピチーブをのぞいた全員	カスピアとエドモンド	ルーシー	ルーシーとリーピチーブ
戦いの質	肉体的	肉体的及び霊的	霊的	霊的
リーダーとしてのカスピアの裁量	○	×	—	×
アスランの顕現	—	みなにみえるように遠くに後姿であられる	さし絵のなかおよび実物で	あほうどりの姿をかりて(声とにおいてはアスランそのもの)
アスランを認める者	—	エドモンド、カスピア、リーピチーブ、ユースタス、ルーシー	ルーシー	声とにおいてはルーシーのみ

こうしてみると、第二部は構造的に絶妙のバランスを持っていることが明白であろう。

第二部において未知の怪異は、可視的なものから不可視的なものへ、外在する者から内在する者へと、漸層的に性質が変化していることにも注意したい。したがって、戦い方も対象物との関係で変化している。最初は、海蛇と乗員との戦いであったが、死水島では自己の内なる強慢、貪欲との戦い、声の島でも自己の内なる虚栄との戦い、そして、くらやみの島でもやはり自己の内なる絶望との戦いに焦点があてられている。海蛇との戦いでは全員が協力することで危機を乗り切れたものが、それ以降の戦いではアスランの援助があつて初めて、勝利が可能になっていることもきわめて意義深い。

ルーシーが自己の否定的な側面を、魔法の本を通して正しく認識したことは、そのあとのくらやみ島からの脱出に大きな影響を及ぼしている。自己の否定的側面を認識しうるほどにルーシーが成長していたからこそ、くらやみ島で絶望におしつぶされずに、アスランに祈ることができたのではないだろうか。くらやみ島

の描写はそれほど強烈で、恐怖に満ちている。読者もこの作品ではここで初めて心底恐怖を感じるであろう。

最後に、第二部では外的な偶発要素があやうく惨事を防いでいる、という点にふれておこう。死水島では雨が、声の島ではくつのなかに入った小石が、その役割をになっている。こうした状況に謙虚に対応することで、危ないところを助かっているわけだ。だが、外的な偶発要素と見えたものも、じつはアスランの配剤である、と考えることはできないであろうか。自己を正しく認識し、絶対者に深い信頼をおくものは、ささいなできごとのなかにも、絶対者の声をきくことができるということであろうか。

(iii)カスピアの自己認識

『カスピアン王子のつづえ』に登場する、ものいうアナグマ、松露とりはいう。「アダムの子が国王になってはじめてナルニアは正しく治まったということ、われわれはけものはけって忘れない」と。¹¹『ライオンと魔女』、『カスピアン王子のつづえ』に描かれたナルニアは、偽りの女王や国王に支配されていた。雪におおわれた冷たい世界や、汚染され、じゅうりんされた無残な世界が提示されていた。アスランに導かれた子どもたちは、住民と力を合わせ、偽りの国王どもを打ち倒し、ナルニアを回復したのだった。

それでは、正しきナルニアにあって、まこと真実の国王とはどのようなものであろうか。その問いかけにたいする答えとなるのが、『朝びらき丸 東の海へ』におけるカスピアの姿であろう。

① 三人の領主の眠り続ける島

風は日ごとにやさしく、波もおだやかになり、「朝びらき丸」は、湖のようになめらかな海の上を、すべるように進んでゆく。ルーシーは、ナルニアではみたこともない星座を、「喜びとおそれのいりまじった気持で」¹²見上げるのだった。やがて、ある夕がた、船の行手に島が見える。

この作品において初めて、夕やけの詳しい描写があらわれる。それは、「朝びらき丸」がいよいよナルニアの海の旅を終結し、アスランの国へつながる新しい海への旅を開始することを象徴しているが、それにふさわしい、きわめて美しい描写となっている。

とある、胸をつかれるほどに美しい夕べのことでした。沈む夕日は真紅と紫に色ど彩られ、空いっぱい広がって、空そのものが広がったか、とみまごころ、右舷のさきに陸が見えてきました。陸はゆっくりと近づき、夕やけのせいで、この新しい土地のみさきもすべて、紅蓮ぐれんのほのおと化しているようでした。けれどもまもなく、「朝びらき丸」の入江にすすみ入り、西側のみさきは、いまや船尾の方向につきでておりました。まっか真赤な空を背景に、黒ぐると、切絵のようにくっきりと。……山というほどのものはなく、枕を思わせる、ゆるやかな起伏の丘が、つらなりあっていました。たましいをひきこまれるような、よいにおいが——ルーシーが「淡い紫色のにおい」と呼ぶにおいが——ただよってきました。¹³

カスピアンら一行が上陸すると、くずれた建物のあとに、長いテーブルがすえてあり、これまでにみたこともないほどの、ごちそうがならんでいた。そして、そこに毛のかたまりのようになって七年の間眠りこんでいたのが、行方不明の三人の領主だった。

強力な魔法が島全体を包んでいる、と悟った一同は、ごちそうに手をつけるのは危険だ、と判断して、カスピアン、リーピーチーフ、ルーシー、エドモンド、ユースタスだけが残り、あとは全員船に引き上げる。ユースタスはここで、自分から進んで残るといい出す。かつてフェリマス島におりたとき、ユースタスは、船よりはどこにせよましたと考えて上陸し、奴隷商人につかまってしまった。このことを思い起こしてみると、危険を

¹¹ *Prince Caspian*, p.65.

¹² *The Voyage*, p.145.

¹³ *loc. cit.*

かえりみず、居残ると申し出たのは、たいへんな成長であるといわざるを得ない。

席についた五名がうとうと眠りかけ、はっと目を醒ましたとき、丘の中腹のドアがあき、ひとりの人物があたりをかざしてやってくる。きわ立って美しい乙女であった。乙女は、三人の領主たちがここで眠りこむことになった、そのいきさつを話してきかせる。三人は、航海のこれからについていさかいを起し、テーブルの上においてあった石のナイフを手にしたとたん、魔法が働き、眠りこんでしまったのだった。この石のナイフは、白い魔女がアスランを殺したときに使われたものであり、その事件を記念して、このテーブルにおかれていた。この話を聞いたとき、エドモンドの顔には苦悩の色が浮かぶ。「いったい、あなたがぼくたちの味方だと、どうしてわかりましょう」と何千年も昔にいったのと、同じことをくり返す。¹⁴それにたいし乙女は、「ただあなたが信じるか信じないか、それだけです」と答える。勇敢なリーピーチーブが、先にたって乾杯し、飲食を始め、四人もそれにならう。

やがて星あかりがほのかになり、白光が空のさけ目からいくすじも、灰色の東の空にさしこんできたとき、再びドアが開き乙女の父親があらわれる。父と娘は両手を前にさし出して東におかう。そしてその姿勢のままで歌を歌い出した。

二人の歌に合わせるようにして、東の空からは灰色の雲が流れ去り、それとともに、白光のさしこむ部分が広がり、とうとう空全体が、白く輝き出し、海も銀色に光り始めました。そして、ずっとたってから、(そのあいだじゅう二人は歌い続けていましたが、)東の空があかね色に染まり始め、そしてとうとう、雲ひとつにもさえぎられることなく、海から太陽が、顔を出しました。その長くさしこむ水平の光線が、テーブルいっぱいさしこんで、金銀の器や石のナイフにあたりました。……露や、テーブルにあたる光の輝きは、いままでに見た、どの朝の輝きにもはるかにまさっておりました。……その瞬間ほど胸が高鳴ったことはありませんでした。なぜなら、いまみんなは、この世の果ての始まりのところに、本当にやってきたのだ、ということがわかったからでした。¹⁵

やがて、大気が歌声にふるえ、何千羽もの白鳥が、登る朝日の中心から、こちらへむかってとんできて、テーブルのごちそうを平らげ、乙女の父親に、まっかに輝く光のかたまりをあてると、飛び去っていく。父親はカスピアンに、この世の果ての果て、いきつづけられる限りのところまで航海を続け、そこに乗員のひとりをおいてくれば、魔法は解ける、と告げる。リーピーチーブは喜んで、この大役に志願する。話を進めるうちに、乙女の父、ラマンドューは、休息のため島におりている星であることがわかる。毎日、白鳥から太陽のかけらで養われるごとに若がり、やがて、みどり児のごとくなったとき、再び空へ登り、もういちど、「かの偉大なるダンスを踊る」('tread the great dance')¹⁶ことになっている。

一同の心は、新たな船旅の冒険のことでいっぱいになるが、カスピアンは指導者・最高責任者として、他の乗員のことを思いやる。かれらは、行方不明の七人の領主を捜すという契約で、「朝びらき丸」に乗船したのであって、世界のはてまでいくという約束はしていない。いかに正しき目的のためとはいえ、乗員たちに何も知らせず、同意も得ずに旅を続けることはできない、とカスピアンはいう。われわれはここで、ナルニアが正しく治められているというとき、そこには法——契約といいかえてもよい——にもとづいた主従関係があることを知る。

ラマンドューは、カスピアンの意見にまったく同意して、「ゆきたくもないものを、むりについでいていたり、ひどくあざむいてつれていったのでは、この世のはてまで船旅をしても、かいのないこと」¹⁷であり、「それでは魔法をとくことはできない。乗員は、ゆく先と目的を知っていなければならない」という。アスランの国に入るために必要なのは、個々人の自由意志と全員の協力なのだ。

事情を説明された乗員たちは、しばしの沈黙の後、さまざまな意見を述べる。その結果、風向きの関係から、この島で年を越し三月に帰路につくか、このまま旅を続けるか、の二者択一の問題であることが明

¹⁴ *The Lion*, p.59.

¹⁵ *The Voyage*, p.145.

¹⁶ *Ibid.*, p.159.

¹⁷ *Ibid.*, p.160.

らかになる。ライネルフの勇敢な申し出にもかかわらず、動揺を見せる乗員たち、そして、リーピーブのことばは、ナルニアの勇者として、あるべき姿を示している。

わたくしは、「朝びらき丸」でゆける限りは東にまいます。「朝びらき丸」が進めなくなったら、小舟をこいでまいます。小舟が沈んだら、この手足を使って、東に泳いでまいります。そして、もはや泳げぬというときには……せめて朝日に鼻づらをむけて、沈んでいく覚悟でございます。¹⁸

最後にカスピアンが立ちあがる。乗員にたいし、「友よ」と語りかけたカスピアンは、アスランの国への旅に、すすんで参加するものたちは、「いと高きわだてにふさわしき」人物であること、その人選は慎重に行われねばならぬことを説く。さらに、この旅に参加できることは「特権」であり、「あかつきに踏み入るもの〔= Dawn Treader〕」の称号は末代までの誉れとなること、帰国後、その行為は十分な恩賞を持って報われることを、明らかにする。そして、乗員の選択のための時間をあたえる。

カスピアンは、国王としてひとを動かすにあたり、カヤ脅迫という手段ではなく、説得〔= persuasion〕を採用している。¹⁹かれはここまで長い船旅を共にし、苦楽を分かちあってきた乗員を、自分と同等の存在〔= friends〕と認め、初心を思い起こさせ、たくみに名誉心を揺り動かし、恩賞を約束し、そして最後には、かれらの自由意思を尊重する。王者としてきわめて見事な演説といえよう。かれのことばは、島の魔力に助けられ、乗員の心を動かす。ほとんど全員が、これからの旅に参加すると表明する。

島をたつまえにカスピアンは、ラマンデューの娘、星の乙女に、「魔法を打ち砕いたあかつきには、いまいちど、あなたとお話したいと願っております」²⁰と、控えめながら結婚の意思を示し、乙女はカスピアンをじっと見つめ、ほほえむことによって、これに答える。

② 最後の海と海中世界の不思議

ラマンデューの島をたつてもなく、乗員はすでに自分たちが異界に入ったことを知る。眠りと食料——人間が生物として生きるにあたって、根源的に必要とされる二つのもの——がほとんど必要とされなくなる。そして、光がいままでよりずっと強くなっていく。これからの描写はおもにルーシーの視点から描かれている。ルーシーは、海水が透きとおりと、深い海の底までがはっきりと見えることに気づく。異界の海底には道があり、波にゆれる森が見える。そして、町や建物も。まるで、高い丘から下を見おろしたときのような光景が、海底に展開される。ただ、地上の世界と異なっているのは、町が高い所にあるという点である。地上では平地に人がすみ、森や山に危険がひそんでいるのとは対照的に、海底では浅瀬に町があり、深みこそ、危険のひそむ場所なのだ。

海底世界の描き方にも、ルイスの面目躍如たるものがある。かれはまず、ルーシーの見たままを描きだし、ルーシーとともに読者が、「はてな」と感じ、そして答に導かれていく、という描き方をする。「未知」の姿をしたものは、ルーシーと読者の、経験と類推をもとにしてイメージ化されたとき、「既知」のものとなるのだ。やがて、ルーシーの視界は魚群にふさがれ、そのあとに、とうとう海の住人が登場する。かれらは王侯貴族であるらしく、巨大な海馬(=たつのおとしご〔sea-horse〕)にまたがり、かい慣らした魚で別の魚をとるといふ、「鷹狩り」さながらのゲームを楽しんでいる。ドリニアンは、この海人たちは異界の住人であり、ナルニアの海の人びとは違うから、乗員に知らせぬように、と警告する。

ルイスは、異界の海底を描く際に漸層法〔= gradation〕の手法を採用している。²¹これは、読者が作品のなかに同化してゆくさいに、きわめて効果的である。ルーシーは、まず道を見て、つぎに町を見て、最後

¹⁸ *Ibid.*, p.162.

¹⁹ 説得については「子どもたちの成長——その2」p. 54を参照いただきたい。

²⁰ *Ibid.*, p.165.

²¹ ルイスの漸層法の手法については、拙論「カスピアン王子のつづえ」『C. S. ルイス——「ナルニア国年代記」読本』山形和美・竹野一雄編(国研出版, 198年3月出版予定)で詳しく述べているので、これを参照いただきたい。

に海人と出会う。しかも、魚群により閉じられた視界が再び開けたとき、そこに海人がいるとは、なんと鮮やかな描き方であろうか。

海におちてひき上げられたリーピーチーフは、海水が「あまき水」であることを皆に告げる。かれが幼い日に、木の乙女から聞いた子守唄の一節によれば、「波あまくなるところ」こそ、アスランの国のあるところだった。まるで光そのもののような水を飲んで、一同は、よりいっそう強い太陽の光にも耐えられるようになっていく。太陽を直視することすらできるのである。

まったくのなぎのなかを、潮流に乗った「朝びらき丸」は進んでゆく。池のおもてのようになめらかな海を。

③ この世の果ての果て

ルースイーは、海中に魚の群れを率^すべる、ひとりの少女を見る。二人は、ほんの一瞬見つめ合い、そして理解し合う。

船はなめらかな海を進み続ける。光のごとき水を飲み続けるうち、乗員は若がえってゆき、船上は静かな喜びに溢れる。やがて前方がまっ白になり、それは水蓮の大群であることがあきらかとなる。輝く水蓮をおしわけて進むうち、やがてこれ以上進めない、というところまでやってくる。

カスピアンは、ポートを下ろせと命ずるが、その目には、ただならぬ光が宿っている。かれは、あとのことは皆にたくし、自分はリーピーチーフとともにこの世の果てを見にゆくつもりである、と告げる。一同は驚くが、やがてさまざまな立場から、カスピアンを思い止どまらせようとする。ライネルフは勇気を出して、それが一種の逃亡行為であることを明らかにする。リーピーチーフは、国王は公的立場の人間であり、私人がごときふるまいは許されないこと、また、カスピアンのしようとしていることは、一種の契約破棄、違法であることを明らかにする。そしてルースイーは、国王と星の乙女の約束ごとを、思い出させる。国王もまた、法に従わなければならないのである。それは、ナルニアが正しく治まるための、大原則なのだ。

感情の激したカスピアンは、ひとりで船室にこもってしまうが、やがて皆の前にあらわれ、涙をうかべて、自分のいたらなかったことを謝る。壁のライオンの飾りが生命をあたえられ、カスピアンに語りかけた。そのまなざしはアスランのものだった。そして、カスピアンは、アスランにいわれたまを一同に伝える。リーピーチーフとエドモンド、ルースイー、そしてユースタスはこのまま旅を続け、それ以外のものは帰路につくように。

ここにおいて、われわれは、ついにカスピアンの国王としての成長が、完結を見たことを知る。国王が、私人としての自分の感情を殺して、絶対者の命令——良心の声といいかえることも可能であろう——に従うとき、絶対者との関係、そして臣下との関係を完成させることになる。

④ 結び

第一部では、カスピアンは、奴隷根性の固まりであったユースタスに、王者の心の寛^{ひろ}さで接し、はなれ島諸島の奴隷制度を廃止するという、ナルニア王にふさわしき、いさおしをたてた。かれはここで、自分の外の敵と戦って、それに打ち勝ったといえよう。そして、第二部の最初の、海蛇との戦いでは、指揮官として見事な采配をふるい、乗員の力を結集して、難局を乗り切った。肉体的な戦いにおけるカスピアンの能力は、ここに一応の開花と完了を見たといえてよかる。

しかし、それ以降は、かれは新たな、内面の敵と戦わなければならない。死水島では、自分のうちなる貪欲や傲慢と、そして、くらやみの島では臆病と戦った。自己の内なる敵を知り、これに打ち勝つことは、外敵を打ち負かすことと同様、もしくは、それ以上に大事な、リーダーの資質であるといえよう。しかし、これだけでは国王としての認識にはまだ足りない。

第三部においては、かれは、臣下の自由意志を尊重し、説得によって臣下を動かすこと、自分もまた法に従わなければならないこと、そして、絶対者との正しき関係にたった上で、私人としての思い入れを捨てて、行動しなければならぬことを認識したのである。「朝びらき丸」のヘッドであるカスピアンが、これらのことすべてを正しく認識したとき、「朝びらき丸」の旅も完了することは、きわめて重要である。

(iv) 解題

ボートに乗った四人が、水蓮の海のなかを進んで、進んで、「三日目の夜が明けたとき」不思議なものを発見する。

子どもたちと空とのあいだに、壁がたちはだかっているみたいでした。その壁は緑がかかった灰色で、ふるえ、光がゆらめいて見えました。それから、太陽がのぼってきました。最初、子どもたちは、その壁を通して太陽がのぼってくるのを見ました。すると、壁はすばらしい虹色に変わりました。それで、この壁と見えたものが、じつは、はばの長い高い波であることがわかりました。波は、絶えることなく一ヶ所にとどまっていて、まるで滝の流れ落ちてゆくところのようでした。それは、9メートルほどの高さがあり、潮流は子どもたちを乗せたまま、静かにそちらに流れていきました……いまや、子どもたちは太陽をまともに見すえ、そして、そのむこうにあるものも、見ることができました。……それは山脈でした。高すぎて頂上も見えませんが、けって忘れられぬものでした。まちがいなく、この世の山脈ではありません。この山脈の20分の1の高さの、そのまた4分の1の高さの山脈でさえも、雪や氷におおわれているはずなのに、この山脈は、どこまで見上げても、暖かく緑におおわれ、森や滝があるのでした。²²

かぐわしい香りがただよい、音楽が流れてきて、子どもたちの胸は、はりさけんばかりの喜びで溢れる。ボートは先へは進めず、リーピーブだけが、小舟ののってすすみ続けることになる。喜びにうちふるえる、この気高きネズミを、ルーシーは胸に抱きしめて別れを告げる。小舟はすすると滝を登り、見えなくなってしまう。そして、太陽が昇りきると、山脈の姿は消え去る。アスランの国は、「あかつき」のなかでのみ見ることができるのだ。このあたりから最後まで描写は、内容的にも重要だが、ことばの響きも美しく、詩的である。このことについては、またいずれ、折があったら触れることとしたい。

子どもたちが陸にあがると、そこには真白な羊が、魚を料理してまっていた。その味はこれまでで最高の味だった。小羊は、アスランの国へ子どもたちが入るには、別の入口——ナルニアではなく、われわれの住むこの世界にそなえられている——からでなければならない、と告げ、姿を変える。

その雪のような白さは、一瞬にして、かっ色がかかった黄金色に変わり、大きくなりました。そこにはアスランその人がいました。そびえたつ塔のように、子どもたちの上にたち、たてがみからは光をほとばしらせて。²³

アスランは、子どもたちに、そのためには川を渡らねばならないが、「わたくしが偉大なる橋のかけ手となるらう」という。

やがて、空が裂け、閃光が走り、三人はもとのユースタスの家にいることに気づく。カスピアンが星の乙女と結婚したこと、そして、ユースタスが、同じ少年とは思えぬほど良くなったことがつけ足される。

さて、ここで『朝びらき丸 東の海へ』の原題 *the Voyage of the Dawn Treader* について考えてみよう。直訳すれば『あかつきに踏み入るものの船旅』である。では、「あかつきに踏み入るもの」とはなにをさすのであろうか。これが船の名であることは明らかである。そして、カスピアン王の演説によれば、アスランの国までの旅を続けた乗員すべてにあたえられる称号でもある。

しかし、それだけではすまされない。すでに見てきたように、本書においては、「あかつき」にかんする重要な描写は、少なくとも三つあげられる。第一は、新生を体験したユースタスがエドモンドにすべてを語る場面である。

……エドモンドはふと、朝早くに目をさました。あたりはちょうど、灰色になってきたところでした。²⁴

この後、エドモンドはユースタスと出会い、新生の体験をきくのである。この物語のなかで、最も美しく重

²² *Ibid.*, p.184.

²³ *Ibid.*, p.187.

²⁴ *The Voyage*, p.83.

要な場面がこれに続く。そして、すべてを理解しあった二人が、しばし沈黙しているとき、朝日がのぼり始める。

明けの星は、すでに消えていました。そして、右手の山なみがじゃまになって、朝日を見ることは出きませんでした。夜が明けていくのがわかりました。二人の頭上と、眼の前の海が、ばら色に変わったからでした。²⁵

すなわち、ユースタスとエドモンドの認識過程は、「あかつき」のときに、あたりが灰色からばら色にうつり変わってゆくなかで、行なわれるわけである。

第二は、アスランのテーブルで、子どもたちが星の乙女やラマンドゥーと出会う場面である。この論文でもすでに引用したので、ここでは詳しく繰り返すことはしないが、灰色から白色、銀色、そしてあかね色へとあたりが変化し、子どもたちは海からのぼる朝日を見る。そして、自分たちが、異界への出発点にいることを認識するのだった。この後、子どもたちは、魔法の眠りをとく方法をラマンドゥーから教わる。

最後は、「朝びらき丸」に別れを告げ、ボートに乗ってから三日目が明けたときの描写である。子どもたちは、のぼる朝日のそのむこうに、アスランの国そのものを見るのである。

このように、「あかつき」は子どもたちの認識過程において、きわめて重要な役割を果たしている。そして、「あかつき」は子どもたちの正しき認識過程そのものを象徴している、といっても過言ではない。

森羅万象が、眠りから覚醒へとうつりかわるときに、子どもたちの認識もまた、眠りからよびさまされ、未知のものを既知のものとしていくのである。そして、ものがたりの始めから、次第に輝きをましてきた光のイメージが、朝日のイメージへと連なり、最終的には、「アスランのたてがみからほとばしる光」に集約されたとき、子どもたちの認識も、ひとつの完結を見るわけである。すなわち、物語全体が、「あかつき」の時を象徴している構造になっているといえよう。

「あかつきに踏み入るもの」とは真の自己を知り、新生を体験したユースタスであり、自己の内なる他者を認識したルーシーであり、エドモンドであり、王者としての認識に到着したカスピアンであり、アスランの国のうたを子守歌として育ち、とうとうそこに到りついたリーピーブでもある。そしてまた、子どもたちとともに、未知のものを既知のものとする船旅に出発し、アスランに出会った読者自身でもあるのだ。

つけ加えておくと、光のイメージが重要であればあるほど、くらやみ島の存在価値も大きくなる。光を奪われた経験のあるものだけが、光の価値を正しく認識することができるからだ。アスランの偉大な光を、心から受け入れられる状態になるためには、子どもたちはどうしても、くらやみ島を通らなければならなかった。

さて、読者の視点は、ユースタスの自己認識から出発し、ルーシーの自己認識を経て、カスピアンの自己認識へと到達するわけだが、これはつまり、ナルニアをまったく知らぬ、こちらの世界の人間→ナルニアとこちらの世界の仲介者→ナルニアの中心的存在へ、と視点が移行していくということでもある。ここにも漸層法の手法が働いて、読者のナルニア世界への同化が、無理のないものとなっているわけである。

アダムの息子やイヴの娘は、ときには誤ちを犯すが、そのあやまちをかてとして、また成長もしていく。そんななかにあって、ただひとり、ナルニアの典型を体現している人物がいる。それがリーピーブだ。かれは、どのようなときも決してゆるがさない。それゆえかれは、他の登場人物が、理想的な状態からどの程度離れた距離にいるかをはかる、ものさしとなる。すなわち、リーピーブにたいして、どのような態度をとるか、友好的か敵対するかで、その人物の人格がはかられる。ちなみに、リーピーブを「芸当のできるネズミ」とみなして、奴隷市場でせりにかけた奴隷商人のごときは、金でしかものねうちをはかれない、人間のくずということになる。ふだんは、リーピーブをよき友人として扱うカスピアンも、リーピーブをのしるときは、理想的状態からは、ほど遠いといわねばならない。

さて、『朝びらき丸 東の海へ』において、われわれは、子どもたちの成長の特質として三つのことを学んだ。一つは、経験をとおして対象を認識する、ということ。これは、ユースタスが、「竜」と「アスラン」を認識する方法であった。詳しくは前篇で述べたので、ここでは繰り返さない。

二つめは、子どもたちが、ときには後戻り^{あと}をしながら成長してゆく、ということだ。新生を体験したのちもユ

²⁵ *Ibid.*, p.87.

ユースタスは、なんだか後戻りをくりかえす。しかし、そのつど心を入れかえて、「良き種」としての、自己の資質を伸ばそうと努めている。ルーシーもエドモンドもカスピアンも同様に、後戻りをくり返し、意外な自己の側面を認識し、そして、そこからまた一步を踏み出してゆく。

三つめは、子どもたちが「アスランの存在」という、いちど受け入れた信念を養う努力を続けていく、まさにそのことが、子どもたちの成長につながり、アスランの国へと到達する道につながっていく、ということである。

最後に、ルイスの描く児童文学の主人公、ということについてふれておきたい。『朝びらき丸 東の海へ』の主人公はだれかと問われれば、少なくとも三人の名があげられよう。ユースタスとルーシーと、そしてカスピアンである。リーピーブも入るかもしれない。つまり、主人公は複数なのだ。主人公たちが協力してゆくことで道が開ける。集団としての知恵がかれらを救うのである。一人ひとり进行分析することも、もちろん大切だが、それをもいちど、総体として捉え直す作業が重要である。

では、この集団のヘッドはだれであろうか。それはカスピアンである。ヘッドは、全員の意見に謙虚に耳を傾けなければならないと同時に最終的な決断を下さなければならない。しかし、ヘッドひとりが主人公というわけではないことは十分述べつくした。

しいて主人公をひとりといえば、それはほかならぬ読者自身である、といえるかもしれない。ユースタスとともに出発し、ルーシーとともに歩み、カスピアンとともに王者の自己認識を獲得した読者こそが。